

私は2011年4月27日から5月30日の間、シカゴにある Rush University Medical Center への海外研修に参加させて頂きました。シカゴはアメリカ中西部・イリノイ州にあり、アメリカ五大湖最大のミシガン湖に接する大都市です。建築・芸術の街でもあり、宿から歩いて 10 分程の所にはアメリカ 3 大美術館の 1 つであるシカゴ美術館があり、ブルースやジャズの生演奏が聴けるレストランが軒を連ねている、大変にぎやかな街です。



シカゴ美術館



ジャズレストラン

今回私が海外研修に参加させて頂いた経緯ですが、私は父親の影響もあり、かねてから整形外科医になることを志望しておりました。研修医 1 年目の時に整形外科をローテートさせて頂いた折、病棟での教授回診の際に長谷川教授から唐突に言われた言葉は「整形志望？なら Rush に行ってみるか！」でした。

当大学病院の海外研修プログラムについては、学報を目にしたたり、実際に海外研修に参加された先生方の体験談を聞いたことがありました。しかし、海外旅行は好きなのですが、1 カ月という長期間を過ごしたことがなく、英語もダメ・元々引っ込み思案である私の性格もあり海外生活を乗り切れるのだろうかという不安で、なかなか決心が付きませんでした。そんな時、長谷川教授に「海外旅行の感覚でいい！大事なのは経験すること。違う空気に触れるだけでも得るものは大きい」とのお言葉を頂きました。また、実際に Rush での海外研修に参加された河本先生、射場先生、加納先生からも背中を押して頂きました。後になって長谷川教授と受け入れ先の Rush University の整形外科・Spine surgery 部門の Professor である An 先生が御友人同士であり、そのつながりがあるからこそこの海外研修であったことを知りました。こんな身近に貴重な体験ができるというチャンスがあるのを逃すのは、一生の後悔になると思い、今回の海外研修への参加を決めました。また、同期の J2 である河合先生と共に研修に行くこととなり、かなり心強かったです。

我々は今回、Sports surgery と Spine surgery をそれぞれ 2 週間ずつローテートさせて頂きました。

私のはじめの 2 週間は Sports で、Assistant professor である Nho 先生のもと、主に関節鏡を用いた股関節、肩関節、膝関節の手術や骨切り術、人工骨頭置換術等を見学させて頂きました。Spine では An 先生のもと、腰部脊柱管狭窄症に対する除圧術や側弯症に対する固定術等の手術と外来を見学させて頂きました。外来は 3 つの部屋があり、その中で患者が待機しており、Dr.が入って行き診察をするというスタイルでした。患者のほとんどがメモを熱心にとっており、時折納得がいけないと Dr.と口論になるというような場面も見かけました。やはり自己主張が強く、また訴訟も多いお国柄なのだなと感じました。



ope 室スタッフルームにて



膝蓋骨 膝蓋腱 脛骨 allograft

アメリカでは医療行為ができないため、手洗いに入って ope を手伝うことや、外来で患者さんの身体所見をとったりというようなことはできませんでしたが、世界有数の施設で医療を間近で見ることができたのはとても貴重な体験でした。特に、allograft(同種移植)片を用いた ACL(前十字靭帯)再建術や半月板移植術を毎日 2~3 件こなしていたのには驚きました。亡くなった方の骨、靭帯、軟骨を graft として関節鏡下に患者に移植するという手術だったのですが、日本ではなかなかお目にかかれない物だと思います。また、アメリカでは専門のトレーニングを受けた看護師が麻酔をかけることができるということも初めて知り、日本の医療との違いを実感しました。



graft の形を整えているところ

シカゴでの 1 カ月を終えて感じることは、当たり前なのですが英語は大事だということです。Rush では中国、台湾、韓国などのアジア出身の Dr.を多く見かけました。Ope 室の麻酔専門ナースに出身地を聞かれた時、日本だと答えると、「インド、中国、韓国からの見学者は多いけど、日本人はなかなかいないよ」と驚かれました。Dr.同士の会話を聞いていたとき、国際学会で中国人や韓国人の Dr.は英語でコミュニケーションがとれたが、日本人の Dr.のほとんどが、英語がしゃべれなかったという話をしていたのを良く覚えています。私を含め、やはり日本人には英語に対する苦手意識のようなものがあるのではないかと思います。(ただし、Rush には日本人の研究者の Dr.も一人おられたそうなのですが、タイミングが合わずにお会いすることができなかつたのが残念です。)

今回の海外研修では、日本とアメリカの医療の違い、文化の違いを実際眼で見て肌で感じることができました。Visiting doctor という立場ではありましたが、研修医の期間であるからこそ、今回のような貴重な体験ができたと思います。1 カ月という期間もあり、様々な人種・価値観とも触れあうことができ、自分自身少しでも成長できたように感じます。

Rush ではドクターも含め ope 室のスタッフ、外来のスタッフは皆陽気でフレンドリーに接してくれました。仲良くなった ope 室のスタッフの 1 人が、シカゴのオススメ観光名所ベスト 10 や観光地で気をつけることなどを教えてくれました。また日本語のあいさつで話しかけてくれたり、こっちもお返しに日本語を教えてあげたりしました。当初は海外研修に対して不安が大きかったのですが、気がつけば毎日スタッフと接するのが楽しみになっていました。

今回の海外研修プログラムに参加させて頂いたことを、プログラムディレクターである長谷川徹教授には感謝しております。また、われわれを受け入れて下さったホストの An 先生には大変お世話になり、お礼を申し上げます。

最後になりましたが、研修期間中にも関わらず、このような機会を与えて頂いた柏原直樹レジデント教育委員長、角田司病院長、福永仁夫学長、川崎明德理事長先生をはじめとする川崎医科大学附属病院関係者の皆様にとっても感謝しております。



外科医の聖地・国際外科医学博物館にて